市民向け講座「薬害サリドマイド被害者の現状を知り、国民として安全に医療を受けるための役割を考える」薬剤師の取り組み

中村由喜[1]、百瀬美紀[1]、薬袋貴美[1]、渡辺香織[1]、保坂昌彦[1]、
中澤奈緒子[2]、浅川由実子[1]、飯島久子[1]、増山ゆかり[3]
[1]TAYA 研究会、[2]データインデックス株式会社、[3]薬害サリドマイド被害者団体 One Team

【背景】

薬害被害を繰り返さないために様々な医薬品行政の制度が創設されてきたが、薬害サリドマイド事件の発生から 60 年以上が経過した現在、被害者の現状を知る機会は少ない。薬機法では医療従事者の責務に加え「国民の役割」が示され、薬局における経過後フォローの義務化やマイナンバーカード等を活用した服薬確認などの環境整備が進んでいる。TAYA 研究会でも、「薬害被害から学ぶ活動」として、薬剤師 WEB 研修や学生向けの啓発活動を継続してきた。しかし、安全に医療を受けるための「国民の役割」についての浸透は十分とは言えず、地域住民が自らの行動を考える機会が必要とされている。

【目的】

市民を対象に、薬害サリドマイド被害者の現状を直接見て聞いて生活を知ることで「自分ごと」として捉え、安全に医療を受けるための「国民の役割」を果たすことを考える講座を開催した。本報告では、薬剤師の地域活動の一環として実施した市民向け講座の開催内容および参加者の感想について報告する。

【方法】

市民 25 人、薬剤師 8 人、被害者 2 人を対象に、全体 150 分の講座を実施した。

1. 薬害サリドマイド被害者・増山ゆかり氏によるサリドマイド事件の概要、60 年以上経過した被害者の生活・現状、人権としての救済についての講演（60 分）
2. 薬剤師による「国民の役割・・医療をうける私たちにできること」についての講演（30 分）
3. 参加者間の意見交換（50 分 / HPV ワクチン副反応被害者ご家族の講話含む）

【結果・考察】

参加者アンケートからは、「自分を振り返り行動を考えるきっかけになった」「自発的に医療に関わる大切さを学んだ」などの意見が得られ、被害者のリアルな声を通して高い関心と意識変化が窺えた。 薬害サリドマイド事件の風化しつつある中で、被害者の声から医療を受ける「国民の役割」を伝えることは市民の行動変容につながる。薬剤師同士が連携してこうした機会をつくることは薬剤師にしかできないことである。薬剤師として「薬害を起こさない」責務を果たし、加害者も被害者も出さない社会のために、継続的な取り組みが必要である。